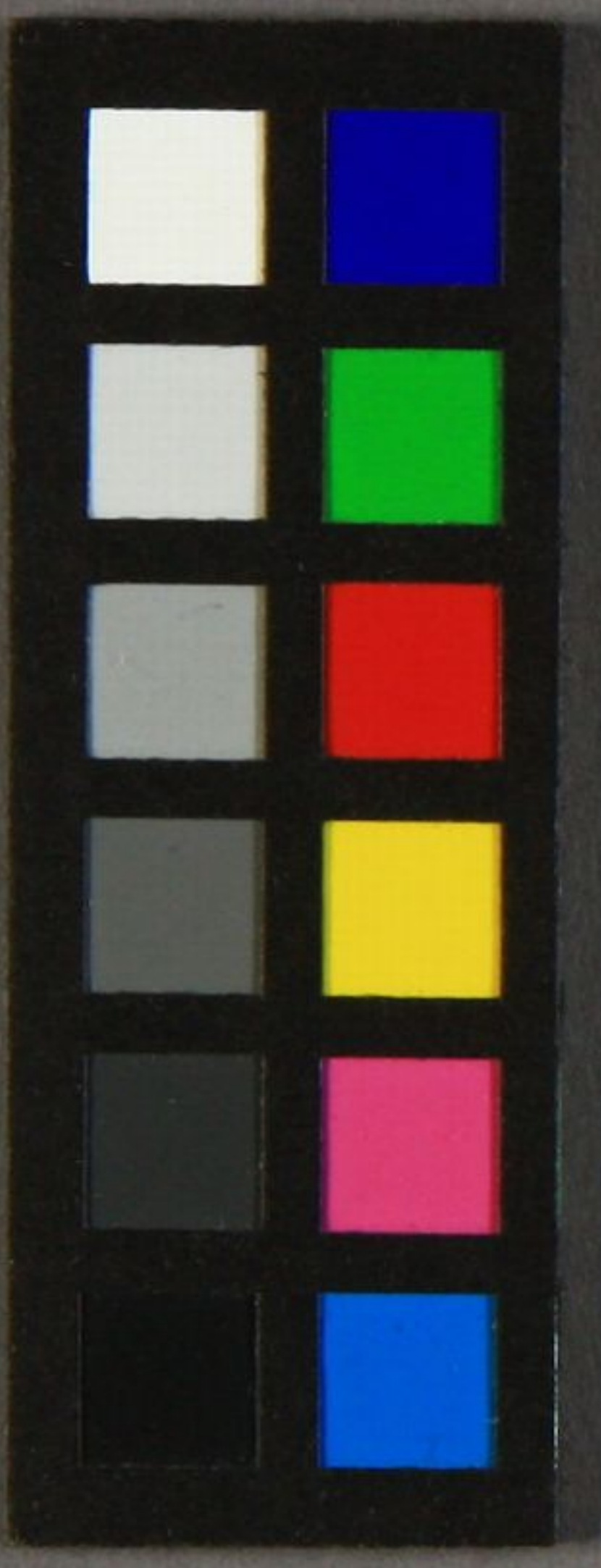


久しく御量さたりの申す過かき何とも
申す量さるゝ先日はまた同進御進附
と云ふ大謝状

東条とて地は北替らず面白き予は
少しものさきか夏来りて蛙を聞かぬ
秋近いて秋を見おし櫛付さ味の酒
も近來は太弱くぢり扱今人比日健
しなれどぢり扱會する予は百五稀
ぢり水生おどは年中追ひまわされ
るより外は藝はさきく読書も近來は
氣かたまおたまくやけ酒を飲け
て三日流連すれば借金は増倍す
馬鹿のさき世の中ぢり神も佛もこつち
から繼のねば矢張り向ひてお呉れぬ
のさるゝ

溝知向題の野櫃横院の堪えお帝
冠の大乱脈はいま替らぬあのさむきの
時お星おは二晩徹夜してゆは馬をき
め込き撥刀の盃ははれせる途中の



今人中丸は本真面目かすは浦
原君一人は他はまづ大変動と申
すへきが平固は半年この方會は
若丸は例の如し
御礼かたぐ御事を御祈ひまし
候す

藤川正人

酒風見

御令聞よりよるしく御傍声
札取申す

拝啓

御出立以来全く御疎音より打過ぎ居りますことと

申訳す

浮腫才に浮腫の随分と御骨折の事と御察

し申上れるレアレの性根など直接御研究の結果

件に面白さや有之べくと是非身差次望し御用

暇も有之はば御報等申上

小生其後の消息一杯して御禮申上れば

七月の、女児産乳ついでと名く

七月十日、余りう水しくもなき工學士となる

全十日より街鉄まつりまれば技師となり谷天

とらされて終日の労働近末は少にあき気味なり

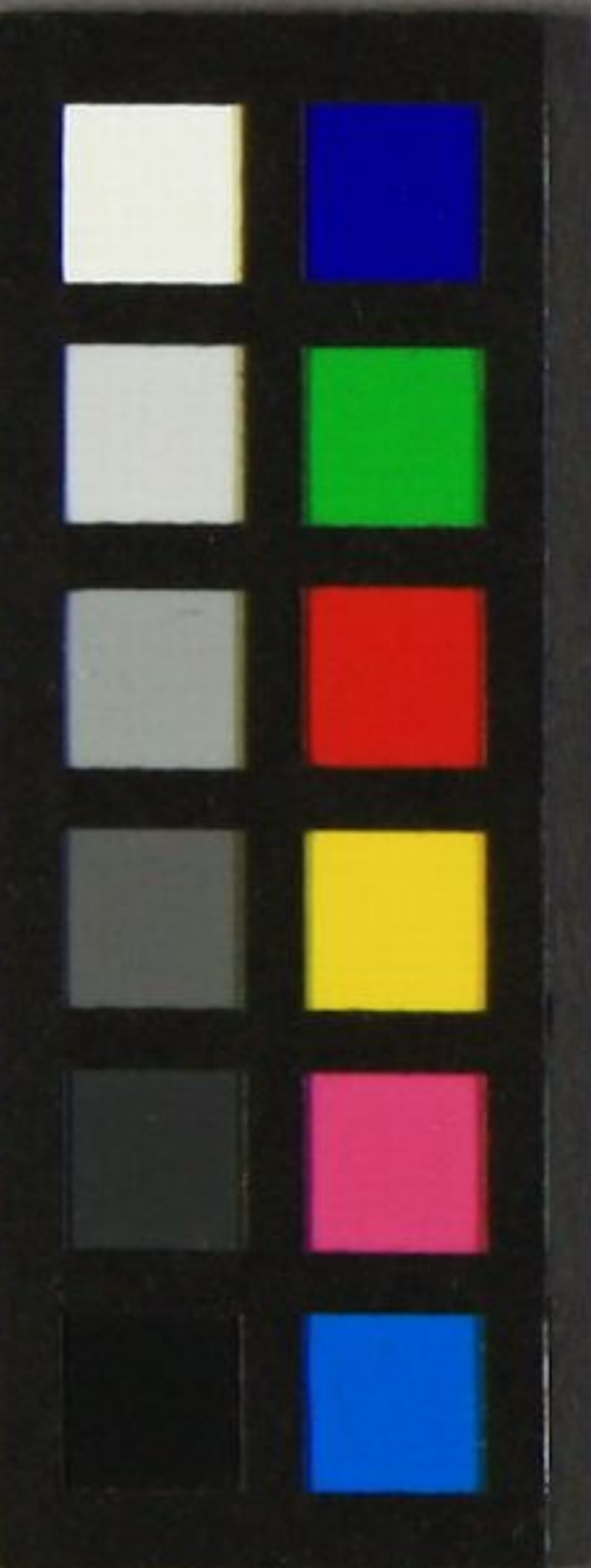
痛飯淋漓の題杯解せざる久し、友おければなり

特に腹いしをなす

先づ大姑丈の如く子に、書は女しも年をせむ、新聞は

よむは近末一程の筆行なり、湯子入るる事しやし

文おし、詩思兼根絶



なごしこも有明子も独歩ノ子も孤人ど途は和
動靜不可知、天涯地角ノ孤兒の如し。

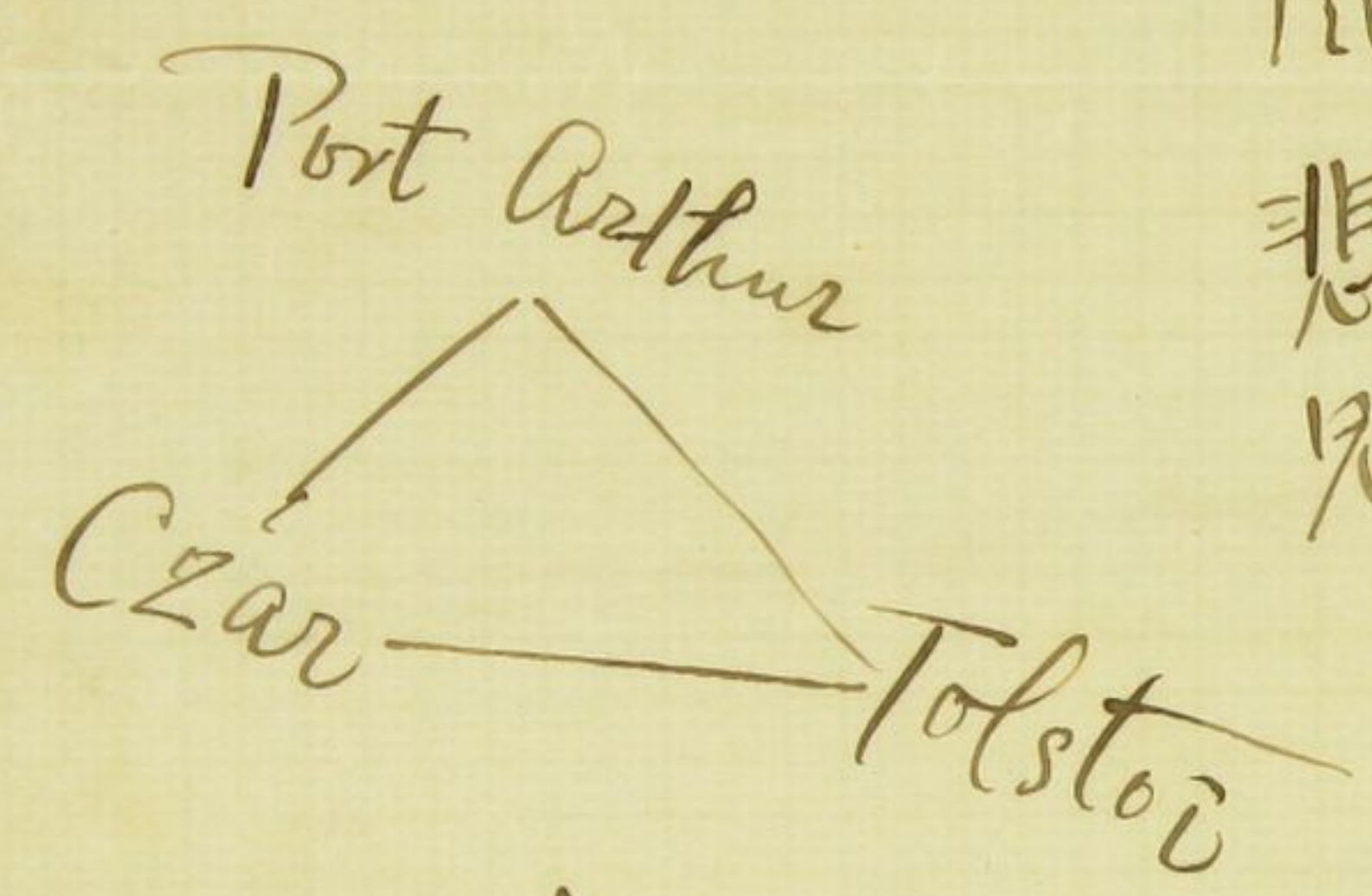
孤兒が孤兒なり人誰か憐然として孤兒ならざる、我利
に己首者之群ニ入りて人黙し唯活動す淋しきと
きあり気味よきときあり社会はこんなものなり、
君もよく知り玉ふ道邊の句々

一生不酔浮世酒

この句をえ 廻深からずや

醒臨川

洒風悲鬼



運命 歴史 社会 矛盾 衝突 執着 悲死

尚也る事志記のとりて一家杯かまへぬ